

T 02
N 69
32

日本における統計学の発展

第 32 卷

話 し 手	安 藤 次 郎
聞 き 手	大 屋 祐 雪
	坂 元 慶 行
	森 博 美

1981年12月13日(日)



私学会館にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

大屋 日本統計学会の創立が昭和6年ですから、本年でちょうど50周年になります。そこで記念行事の一環として先達の諸先生方に、「私と統計学、あるいは私と統計事業」というようなことで、自由に思い出を語っていただき、「聞き書き」を残そうということになりました。

それで、本日は、私ども3人で、先生に、学生時代から今日までのいろいろな統計についての、あるいは統計学、統計学者についてのお話を伺おうというわけでございますが、どうぞひとつよろしくお願い申し上げます。

安藤 私は、経統研の創立以来の会員ですから、統計学者とのかかわりはあるわけなんですけれども、私自身が統計学者ではないんで、インタビューの対象に選ばれたことは非常に光栄だと思っておりますが、内心忸怩たるものがあるわけです。

私は、統計講義を金沢大学及びいまの大学と続いて、もう25年以上やってきましたから、「統計講義をやっております」ということは人様にいつているんですけれども、「統計学者です」とか、「統計学の勉強をしています」とかいうことは、いったことがないんです。常に真実を語るわけなんです。(笑) したがって、私がインタビューの仲間入りをしたことを、本当の統計学者が聞いたら、中には憤慨する人がいるんじゃないかと思うんです。

昔、陸軍に輜重輸卒という兵隊がありまして、輜重部隊は輸送が任務で、戦闘部隊ではないところからべっ視されていたわけで、「輜重輸卒が兵隊ならば、電信柱に花が咲く」とか「蝶々、トンボも鳥のうち」というざれ言葉があったのですが、私が統計学者ならば、まさに「蝶

ま、トンボも鳥のうち」ということになるんじゃないか。
(笑)

つまり、私は若いときに、学者になろうという志を立てたことは全然ないんで、25年以上にわたって統計の講義をしてきたことは、全くの偶然なんです。外から見ればプロフェッサーに見えるのかもしれませんが、私自身は、「でもしかプロフェッサー」でしかないと考えております。やむなく統計講義をしてきたというのが、正直な話なんです。

私が統計講義をすることになったのも、全く偶然の成り行きからなんです。戦後しばらくの間、労働運動をやっておりましたが、政治情勢その他が変わってまいりまして、また自分自身、もうこれ以上労働運動をやり、政治活動をやっても、あまり成果はない。自分はそういう方面には向いていない。そういうふうに自覚したものですから、運動から身を引いたわけです。それで、あれで3年ぐらい何もしないで浪人しておりました。

しかし、いつまでも浪人していたんでは食えなくなる。本当に食えなくなっただんです。女房の着物を全部質に入れたり何かして、ひどい窮境に陥ったわけです。何とかして食っていく道を考えなくちゃいかぬ。何になれるかという、先生にしかなれないというわけですよ。先生になるには、何の先生になるかということになって、にまたま大学で有沢広巳先生のゼミナールにいたものですから、講義するとすりや統計しかできないだろう、そういうことで統計の講義をするようになったんです。

私が有沢ゼミナールの学生になったというのも偶然なことでして、統計の勉強をしたいために有沢ゼミに入った

わけじゃない。私が大学に入ったのが昭和8年でありましたが、そのころに、それまでたしか東京の田園調布の方に住んでおられた向坂逸郎さんが、等々力の方に移ってこられた。向坂さんの等々力の家というのが、私の家のそばなんです。私の家は九品仏にある。

そんなことで、大学に入ってからある日、自由が丘の古本屋へ行ったんです。そうしましたら、その古本の中に、林房雄が訳した「クーゲルマンへの手紙」という単行本があった。それに「向坂蔵書」という蔵書印が押してあるわけなんです。古本屋というのも新しく開いた古本屋でして、大学出て浪人しているような若い男が2人でやっておりました。そこで、「この向坂蔵書の本はどうしたんだ」といったら、向坂さんがこの近所に引っ越してきて、引っ越し荷物の整理をする関係で売ってくれたんだというわけですね。それじゃ一度向坂さんの家に連れていってこないかといって、古本屋に連れられて等々力の家を訪ねた。これが私と向坂さんの初対面なんです。それからときどき向坂さんの家へ遊びに行くようになった。

2年生になりまして、ゼミナールが開かれることになって、どこのゼミナールに入るかということ、向坂さんが口をきいてくれれば、有沢さんのゼミに入れることは確実だというわけで、口をきいてもらって有沢ゼミに入ったわけなんです。別に統計の勉強をしたくて入ったわけじゃなくて、有沢さんの名前を知っていたし、向坂さんに口をきいてもらえるということが入った。まさにそういう偶然でやったわけなんです。

有沢ゼミでやりましたことは、工場統計表の加工を夏

休み中やってくれということ、ちょっとやりました。それが、後で考えてみますと、改造社の「経済学全集」の経済統計表を集めた4冊本[『日本経済統計図表』]がありました。あれの下調べみたいな役割りをしたんじゃないかと思うんです。

あと、ゼミナールでやっておりましたのは、山田盛太郎さんの『日本資本主義分析』をテキストにした輪読会みたいな——ですから、有沢ゼミもあんまり統計とは関係がないんですよ。もっぱら『分析』について学生同士でいろいろと議論をして、有沢先生が、学生の議論を整理するためにとときどき発言した。この「資本主義分析」は、何か一つのものをいろんな方面から指しているんじゃないか。つまり、天皇制打倒の問題を指しているんじゃないかというようなサゼスチョンをしたり。

そのときに、一番はっきりした態度で有沢さんと議論したのが、いま経統研の会員になっている木原行雄君ですね。木原君は、「私は天皇制打倒は正しいと思います」とはっきりいいました。あれは非常に印象的だったな。有沢先生も、「彼ははっきりしているね」とか何とかいっていたね。ぼくはあんまりはっきりしていなかった。というのは、つまり講座派と労農派の対立で、学生は大部分講座派だったわけですが、私はあんまりはっきりした講座派にはなりきれなかった。つまり、それだけ私は『資本論』をよく読んでいたということになりますかね。(笑)「まず『資本論』に戻って考えなくちゃいけない」ということを、私はいつていた。これは向坂先生の影響だと思うんです。

そのころ、私たち学生仲間でこういうことをいっていました。名前を出すと鈴木君が怒るかもしれませんがけれども、鈴木鴻一郎君がいつていたんで、「有沢先生は何でも知っている、何を聞いてもすぐ答える、ただ統計学のこととはあんまり知らないらしい」。(笑)これは有沢先生には内緒の話なんですけど、そういうわけで、統計学の勉強を有沢ゼミでやったという記憶はほとんどありません。事実、やっていなかったわけですね。

しかし、その有沢先生が、戦後、日本統計学会の会長になり、いまや学士院の院長になって、文化功労者になった。私たちゼミの門下生としては、非常に喜ばしいと思っておりますけれども、同時に、若干残念だという気もいたします。というのは、私たちが学んだときの有沢先生は、やはり日本の左翼学者の一人として数えられていたわけですね。アメリカの喜劇俳優マルクス4兄弟の映画が上映されていたころなので、大宅壮一なんか「にせマルクス4兄弟」なんていって、やじっていましたけれども。そういう点からいうと、戦後の有沢先生は完全に体制に取り込まれてしまって、ある意味では世間的には有名になり、出世なさったわけですがけれども、私たちはむしろ反体制の陣営の学者として接していたので、いまの有沢先生とかなりイメージが違うわけですね。

有沢先生の門下で統計学者になった人は、非常に少ないわけですね。私を別にしまして、米沢さんと中村隆英君ぐらいですね。それに比べて、蜷川門下からは非常に多くの統計学者あるいは統計講義をする人が出ている。そういう意味では、統計学の発展に貢献するということにおいては、蜷川さんの方が大きかったと思いますね。

ただ、有沢先生は、統計のことはあまり知らないけれども、ほかのことは何でも知っているという幅の広い人だったので、その幅の広いという点においては、私はやはり有沢門下の直流ではないかと思うんです。(笑) つまり統計学の発展にはあまり貢献していないという点で、有沢直系なんです。しかし、これは有沢先生には内緒の話です。

そういうわけで私が金沢大学に就職して、統計の講義を始めたということは、私自身が統計学を勉強していたということとは全然違うんで、そういう事情であります。大学で統計の講義を始めた直後は、かなりまじめに統計の本を読んでいたつもりです。「統計学古典選集」なんかを改めて読まなくちゃいけないと考えて、読み始めておりました。

そのころ、にまたま金沢の橋場というところに南陽堂という古本屋がありまして、その古本屋でカール・ピアソンの『ガ・グラマー・オブ・サイエンス』の第3版の上巻を見つけたわけですね。それが、私が『科学の文法』を翻訳する偶然のきっかけですね。エブリマンス・ライブラリーの1冊として、初版の復刻本を手に入れたしまして、それから京大の大橋隆憲さんに頼んで、京大の図書館から第2版を借り出してもらって、訳したわけですね。ただし、その訳本は出版はしておりません。自分で第3版の上巻だけプリントをつかって、経統研の会員諸君に頒布しただけです。原稿は一応全部できています。注だけ訳し残したのが若干あるんで、それを全部訳してしまわないと出版できない。ところが、ひまがなくていまだに残っている。70歳になりました、また2度目の定年退

職をした後、ひまになったらやろうかなと思っています。
 どうせ商品価値はないかもしれないけれども、統計の勉強をしている人には何かの役に立つと思いますから、長生きしたらそういうサービスをいたしましょう。

それから中国の統計文献の紹介をしたわけですが、これもたまたま私が、中国語はしゃべれないけれども、中国語の本を読むことはできるということが理由であり、またもう一つは、日本の学者は欧米の文献を非常に尊重して、中国の文献を読む人が非常に少ない。そこで、中国の統計学を紹介する人が当時はほとんどいなかったわけですね。だから、人のやらないことを、私ならそういうことならできるからということで、中国の統計局の雑誌などを手に入れまして、若干の文献を紹介したわけですね。そういう意味では、中国の統計文献を紹介した人間としては、私は一番早かったと思います。

しかし、残念なことに、1958年ごろをピークとしまして、中国の統計活動はやがて混乱してしまうわけですね。特にプロレタリア文化大革命が始まってからは、すっかりダメになってしまうわけですね。ですから、私の中国統計文献の紹介も、そのころをもって終わりになるわけですね。1964年の北京シンポジウムで中国へ行ったときに、^{シエム・チヤ}薛暮橋に会いました。その報告は、経統研でもいたしましたけれども、そのころ中国の統計学者たちがやった「統計通信」なんかに載っておりまして統計学の講座を訳したり、あるいは楊堅白の『統計理論の基本問題』という本を訳したりしました。

これは一つは、欧米の文献をもっぱら読む日本の学者に対するサービスと同時に、もう一つ、私は、日本の学

者を含めまして、いわゆる欧米流のアカデミックな学風に対して、中国の人たちの書いているものは非常に実践的なものが多い。そういうアカデミックな風潮に対する一つの皮肉といいますか、反省を求めるという効果もあるんじゃないかということで、中国の統計学の文献を訳したわけです。

最近ようやく中国でも、「統計」という雑誌が復活したようです。ですから、これからまた中国の統計文献の紹介活動ができるようになると思います。しかし、もう私は年をとってしまったし、これは大屋さんのところにいる山田茂君なんかこれからやってくれるだろうと期待しております。

私の統計学とのかかわりということになりますと、経済統計研究会の会合にかなりまじめに精勤して、出席していたことですね。そして「開会屋」というあだ名をちようだいすることになったわけです。しかし、経統研での私のやったことも、一種の落ち穂拾いみたいなサービスでしかない。いわゆる学者的な研究のお役に立つようなことはなかったというふうに思っております。

というのは、私はアキレス腱を持っているんです。アキレス腱はだれしも持っているわけですがけれども、特に統計の勉強をする上でのアキレス腱があるわけです。というのは、私は計算ができないんです。戦前の私たちの世代の人間は、みんな小学校でそろばんを習っているわけです。ところが、どういうものか、私はそろばんを習っていないんです。私が初めて上がった小学校が、香港日本人小学校でした。幼稚園がわりに1年早く入学させてもらい、2年目に、ただし正規には1年生のときに横

浜へ来まして、横浜の小学校へ転校して、横浜市内でも
 う一つ転校して、2年のときでしたか、神戸の小学校へ
 変わりました。ですから、小学校を4つ変わっているわ
 けですね。その関係じゃないかと思うんです。そろばん
 を習ったことも、買ったこともないんです。たいてい昔
 の小学生は、そろばんを持って学校へ通っていたと思う
 のです。そういうわけで、私は全然そろばんを習ったこ
 とがないんです。そろばんをはじけない。それが一つ。

もう一つ、私は昔は秀才だった。小学校の卒業証書も、
 中学校の卒業証書も持ってないんです。みんな1年早く
 上級校へ入っちゃったんです。中学4年から高等学校へ
 入っちゃった。昔は、三角法というのは中学5年で教え
 たわけなんです。ですから、私は三角法を習ってないん
 ですよ。三角法のサイン、コサインの概念だけは知って
 いるけれども、計算はできない。あれは若いときに丸暗
 記で覚えなくちゃできないんですね。ですから、統計の
 講義を始めて、曲線が出てきて、サインが出てくるんだ
 けれども、私自身は計算できないんですよ。そういうこ
 ともありまして、計算能力が全くないわけです。

それともう一つは、ドイツ語が読めないんです。とい
 うのは、ドイツ語を読むのをやめちゃったんです。私は
 第一高等学校でドイツ語を習いましたから、非常にいい
 先生に習っているわけですね。一番最初に習ったのが、
 相良守峯教授なんです。相良教授がドイツ留学から帰っ
 てきて、初めて講義した2年目ぐらいでした。その次に
 習ったのが、竹山道雄さんなんです。竹山道雄先生も留
 学から帰ってきて、まだ坊ちゃん坊ちゃんして若かった。
 そういう、いまでいえば非常にいい先生にドイツ語を習

ったわけですがけれども、高等学校2年生のときに、私は一度落第するわけです。そこで、落第して同じことを繰り返すのがいやだというわけで、3年のときにロシア語の講習会に行って、ロシア語の勉強を始めたんです。ここでも八杉貞利先生という大先生の講義を受講したことがあった。そんなこともありまして、ドイツ語とロシア語と両方やっていくのがめんどくさくなって、ドイツ語はやめちゃったんです。ですから、ドイツ語とロシア語の初歩的なものならば読めるんですけども、それから先ちゃんと勉強していかないわけです。研究者として読むだけのドイツ語の力は持っていないわけですね。

それから後、ずっと戦争でしょう。そこでロシア語も、「プラウダ」「イズベスチヤ」、政治や経済の論文ぐらいを読めるぐらいになっていたんですけども、戦争中ずっと読むチャンスがなくなってしまって、ロシア語も忘れちゃったわけです。そのうちに、中国にいましたから、中国語を読むようになったわけです。やがて戦争が終わって、中国語が読めれば、ロシア語の文献は中国語に訳されるし、ですから、ドイツ語、ロシア語はやらぬでもいい。若いときは語学が好きだったんですけども、語学というのは幾らやってもきりがありませんから、そう3つも4つも外国語をやったってしょうがない。オレは英語と中国語さえやっていれば、たいいてい必要な文献はそのどちらかに翻訳されるからいいだろうということで、外国語に時間を費すことはやめちゃったわけですね。

ところが、中ソ対立が深刻になって、中国がロシア語の文献の翻訳をやらなくなっちゃったわけです。中国統計学の最初の文献は、みんなロシア文献の翻訳だったわ

けです。そういう意味では、中国語でロシア語の文献の訳が読めたんですけれども、そういうことで私の非常にずるいあてが外れてしまったわけです。

それともう一つは、英米の統計学の書物が、ほとんど数理統計学のあれになってしまっております。いま「エンスイクロペディア・ブリタニカ」のステイステーションの項を引くと、七十幾つの数式が出てくるだけです。から、数理統計学の本を熱心に読む気も起こらない。それが私の、統計学を本格的に研究する上でのアキレス腱ですね。

もう一つは、大屋さんもよくご存じのように、私が2足のわらじをはいたわけです。最初、統計の講義を始めて、統計文献の読書にかなり時間を割いていたわけですが、たまたま私の友人の頼みで、金沢の北陸鉄道労働組合という労働組合のために話をした。それまで私は労働運動をやっていましたから、労働者に対する話し方が、普通の学校の先生とは違っているわけですね。そこで労働者は、大学にもあんな先生がいるのかと非常に喜んだわけですね。それから、労働講座の依頼が次から次へと来まして、また時期も、いわゆるMSA援助反対とか、警職法反対とか、あるいは60年安保反対闘争という時期で、労働者の学習熱が非常に高まっていた。そこで労働講座をやり出したら引っぱ張りだこになってしまって、非常に忙しくなった。

労働講座というのは、いろんな問題について答えなくてはならない。毎日、新聞を丹念に読んでおく必要がある。労働講座の話し方というのは、いわゆる大学の教壇から話すのと、全くスタイルの違った話し方をしなくて

はいけない。つまり聞く労働者は、労働運動をやる必要に迫られて勉強をしているんですから、組合活動、実践活動と結びついた、行動に結びついた話をしなければならぬ。ところが、大学においてはそういうことではなくて、いわゆるアカデミックなスタイルで話をしなくちゃならない。つまり、こういう議論がある。それをどう理解するかは、それぞれの立場に立って考えるべきことだということではしゃべるわけでしょう。ところが、労働講座でそんなことをいっていたんじゃダメなんで、労働者の立場に立って、労働者の行動に役に立つようなスタイルで話をしなくちゃいけない。どっちを向いてしゃべっているのかわからないというような話し方では、役に立たないんです。

これをしみじみ感じたのは、警職法反対闘争のときでした。「おい、こら警察」反対だということで、全面的に労働者が立ち上がった。そこで、同じ日にあっちこっちで組合が集会を開くものですから、労働講座の講師が足りなくなっちゃってしましまして、しょうがないから法科の先生に頼んだんです。ところが、法科の先生は組合に行って、大学の教室と同じスタイルで話していたわけですね。法律というものは、条文の解釈がいろいろある。また、悪い法律でも、使い方によってはこれをよく生かすこともできる。そんな話をするわけです。それで、せっかく来てくれたけれども、あれじゃ役に立たぬというわけです。つまり、この法律は悪いんだから、断固として立ち上がってぶっつぶせ、そういうことをいってくれなくちゃ労働講座にならない。そこで、もう一度安藤先生来て、やり直してくれというわけだ。そこで二重手間でしたけれ

ども、また行ってやったりした。おもしろかったですけども、これは労働講座と大学の講義とが、いかに違ったスタイルでやらなくちゃならないかということも、わからしてくれる話だと思うんです。

そういうふうには、労働講座にかなりの時間をとられる。安保反対闘争の一番盛んだったころは、年に100回近く労働講座をやっていましたね。ですから、大学の講義よりも、労働講座の方が本職みたいなもので、私自身がこっちの方が好きなものだから、そんなことがあって、だんだん統計学の勉強をしなくなっちゃった。つまり、研究者として統計学に没頭することはなくて、講義に必要な限りにおいて統計学の本を読むという程度。しかし、労働講座は、話をわかりやすくしなくちゃいけない。相手にわかるように話をする修業の場としては、非常に役に立ったと思います。

というのは、たまたま大阪経法大学の何の先生か知らないけれども、アイステッドという人が、こういうことをいっていました。これはいまから3年ほど前の毎日新聞に載っていた話ですけども、「さっぱりわからないことを教えても意味ないでしょう。学生の水準に合わせ、わかるように教えるのが教育じゃないですか。この原則を、なぜか日本の大学は忘れています。教授たちが自己満足のため、いたずらにあずかしい講義をする。これはナンセンスです。」こういうふうには、日本の大学の講義を批判しているんです。

そういう点では、やさしくわかりやすい話の仕方をするということと、実践的な問題とのつながりを頭に置いて話をする。そういう修業としては、労働講座は役に立ったと

思うんです。ですから、私の大学での講義も、そういう面を生かした努力はあったと思うんです。

もう一つは、統計学というのはそもそも官房学、政府の立場に立つ人、政府の仕事としてやるチャンスが多かったわけですが、そういう官房学としての統計学を、人民の統計学に変えていくという線に沿った努力は、ある程度したのではないかと思います。

安藤 私は、統計学の発展のためには、ほとんど何ら貢献はしていないと思いますが、統計教育については、私なりに考えてきたつもりなんです。その線に沿った一つの努力は、経統研の総会で報告しまして、後に出版いたしました『統計のための教養』という私の講義録の話です。つまり、大学教養部における統計講義は、統計学の話をする前に、社会科学入門的な話をしなくちゃいけない、社会科学についての姿勢ができていなければ、統計学の講義は役に立たぬ。そういう趣旨であった。

しかし、「統計のための教養」という講義録を本にしましたのも、偶然の成り行きからなんで、たまたま1964年の北京科学討論会に参加することになりまして、これは経統研から推薦していただいたわけですが、その中国へ行く旅費をつくらなくちゃならない。その旅費の調達のために、あの講義録を本にしたんです。大橋さんの世話だったと思いますが、京都の啓文社という本屋に話をしてくれまして、10万円印税を先にくれということです。啓文社の方で、1000部売れることを保証してくださるならば、10万円先にお渡ししますという。それじゃ、それは保証すると言って10万円もらって、旅費にして行った

わけなんです。その約束どおり1000部売れたところで、絶版にいたしました。

というのは、講義をそのまま本にしたわけですから、完全な速記録なんです。ですから、そんな本を学生に持たしたんでは、こっちはしゃべることなくなっちゃうわけなんで、(笑) また別のこともつくってしゃべらなくちゃならないんです。そこで、全部はけたところで絶版にしちゃったわけです。それから後、私は講義を自分でプリントにつくって、学生に渡しておりましたけれども、本にするのはそれでこりちゃったわけです。

しかし、社会科学の話をまずして、社会科学入門の知識を与えた上で、統計の講義を始めるべきだという考え方は、私はいまでも正しいと考えております。私自身があまり統計の勉強をしていないものですから、教養の講義の内容が、とかく社会科学入門の話に片寄っちゃって、統計の話はついたりみたいなことになってしまいましたけれども。

それからもう一つ、私が統計教育の上でやりましたことは、実践の場にいる統計家に対する関心を忘れなかったことです。実践の場の実情を統計学者たちに紹介すること、それから統計マスを学会に近づけるということですね。そんなことも考えて、統計調査員とのインタビューなんかを、経統研の報告として出したわけですね。ああいうことを、あらゆる地方の統計学者がそれぞれの地域でやってくれることが、統計環境をよくするために必要なことじゃないかと私は思っています。

そういう点で、これはこの前の関東支部の例会で話したことですけれども、皆さんに差し上げたプリントの最

後に、^{こでら まさみ}古寺雅美という人が書いた『統計学以前の統計入門』という本の著者の前書きの中に、こういうことをいっているんですね。

「なお、著者自身、統計の専門家というよりは統計の実務家であって、まことに浅学であり、誤りも多々あるのではないかと恐れている。多くの方々からのご叱正を乞う次第である。本書は、大塚祖之助氏（東京都総務局行政部地方課長）の強いご示唆がなければ、この世にでることにはなかったであろう。また、東京都の統計部の方々には、使用統計データに関して、何かとお世話になった。」—— こういうことを書いているわけです。

つまり、統計学の教科書はたくさん出ているんです。しかし、そういうのがあまり役に立たないから、古寺さんに、また書いてくれという依頼があったんじゃないかと思うんです。そうして古寺氏は、統計のつくり方についての非常に詳しい講義をしているわけです。ですから、古寺さんは、統計の専門家というより実務家なんだと、非常に遠慮した言い方をしていますね。そこで、自分の書物の題に、「統計学以前の統計入門」とつけているわけです。しかし、その内容は、多くの統計学教科書と大同小異であり、むしろそれよりも詳しい。そういう実務に役に立つ、詳しい親切な説明の書いてある書物に、「統計学以前の統計入門」という題がついている。そうすると、多くの大学の先生たちが書いている、実務家にはあまり役に立たない統計学の教科書は、統計学以前のものなのか、統計学とっていいのか、一体統計学とは何なんだという非常に皮肉な問題が出てくると思うんです。そういう意味で、統計学の多くの教科書は、統計を

つくる人のために行われている講義のようですけれども、実は本当に現場にいる人には役に立つほど親切には書かれていないという問題が、そこにあるんじゃないかと思っています。

もう一つの問題は、私は統計講義というものは、一人でできない。これは、私が二十数年やってきてしみじみ感じていることなんです。特に経済統計学の講義は、一人でやることは無理だ。これは、私の金沢大学での「さよなら講義」の中にも話してあることなんですけれども、統計という仕事が、もともと集団作業なんです。ですから、統計学の講義も、集団で行うべきものだ。集団で行って、初めて部門統計に触れた話ができる。一人でやっていけば、部門統計のすべてには話が行き渡ることができません。したがって、統計講義が一人で行われているために、経済統計学が実質的に部門統計を離れた話になってしまっている。そのために、実践にあまり役に立たない。本当に実践に役に立つ統計学講義をやろうと思えば、部門統計をそれぞれの人が分担して、集団で講義をしなくちゃいけないというふうになると思うんです。それが行われていないために、「数字あれども統計なき統計学」というものになっている。つまり、必然的に数理統計学になっていってしまう。

経済統計研究会で、内海さんや大橋さんなんか、蜷川統計学の流れをくむ人たちが、統計学は社会科学の方法論としての統計方法を対象にする学問だと、いわゆる統計方法論説をとっておられますけれども、私はそれと少し意見が違うんです。統計方法論説で一人で講義をしていけば、おのずから数理統計学になっていってしまう。そうい

うふうに私は思うんです。したがって、統計学は、統計方法の学問であってはならない。むしろ「統計の学」にならなくちゃいけない。つまり、部門統計を取り上げる講義にならなくちゃいけない。そうすると、それは独立の科学ではなくなってしまう。つまり、考古学が歴史学に役立つ補助学であると同じような意味で、「統計学はあらゆる社会科学に役立つ統計を対象にする補助学である」。これが、私のいまの到達している考え方なんです。

それともう一つは、これはこの間、経統研の関東支部の例会で報告したことですが、つまりいまの大学——国立大学はまだまだそこまで落ちていないと思うんですけれども、私は城西大学に来てしみじみ感じた。「これが大学か」とびっくりしました。いわゆるマス型大学というのは全くひどいものだ。経済学部 of 学生なんだけれども、経済学をやろうと思って経済学部へ入ったんじゃないんだということを、非常に正直にはっきりいいます。いまの学生が一番いいところは、うそをつかないで正直にいうということです。恥ずかしいことでも、平然と本音を吐く。だから、「先生、ぼくら経済学をやるつもりで入ってきたんじゃないやありませんよ」とはっきりいいます。その経済学をやる気が全然ない学生を相手に、統計学の講義をしているんです。ですから、聞く学生は、経済学をやる気もなければ、統計をつくる気もないわけです。ただ、単位をもらえなきゃ卒業できないといって、出てくるだけなんですよ。

そういういまのマス型、大衆型大学の学生に対して、統計をつくることがあるかもしれないなんて夢にも思っていない学生に対して、統計をつくることを主にした統

計の講義をやっている。これは、私はナンセンスだと思うんです。そこで、ますます学生に応じた講義を工夫しなくちゃいけないと思うんです。

そういうことを考えて、ことしはやっているわけです。この間、皆さんに差し上げたプリントは、そういうつもりでやっている。ですから、集団講義を実現する一つの糸口として、自分の講義のプリントの中に、いろんな人の話をゲストとして招いているわけなんです。やがてご本人を招きたいんですけれども、ご本人を招くことがすぐに実現しないものですから、まず書いたものを収録させていただくということをやっているわけなんです。

この間、山田茂君から、いま出始めた「統計」という中国の雑誌をもらいました。中国の学者の活動が、統計関係においても、ぼつぼつ軌道に乗り始めているようです。私は、そこからまた何か紹介できるものが生まれるんじゃないかというふうに考えております。中国の学者は、あんまりアカデミックでなく実学的です。つまり、認識、知識の体系を目指さないで、実践の指針としての学問ということ、彼らはおそらく無意識にそうなっているんだろうと思うんですね。

坂元 昔からですか。

安藤 昔から。大体中国の古典というのは、みんな語録です。「論語」にしても、「孟子」にしても、みんな語録です。ですから、いわゆる哲学といっても、西洋流の哲学とは違うわけです。みんな、日常生活の中の実践を通じた考え方で裏打ちしているわけです。そういう意味で、アカデミズムでなく、非常に実学的だと思います。そういう実学的な背景があったから、毛沢東のプロレタリア

文化大革命ということもできたんだろうと思うんです。それには、メリットもあれば、デメリットもあるわけですが、すけれども、私は中国の学風のいいところは、そういう実践の指針になることを常に念頭に置いている。そういう意味では、人間づくりを忘れていないということではないかと思うんです。そこに、期待したいと思います。

いったん十数年にわたって学会活動がストップした、混乱した経験をしたわけですから、これから外に向かって開かれていくにしましても、かつての明治初年の日本のように、西洋一辺倒みたいな受け入れ方はしない。一度はソビエトに学ぼうとした。今度は、中国流の社会主義を打ち立てるんだということで行くわけですから、英米その他に門を開いても、おのずからバランスをとった受け入れ方を考えていくんじゃないか。中国の新しい世代がどういうふうに育ってくるか、まだよくわかりませんが、そういう意味で、私は、中国の統計学文献の紹介も、やがて続けて再開する意味があるんじゃないか、そういうふうに考えております。

私がいまどういう心境にあるかということ、最後に申し上げておきたいと思います。

いまはつきりした記憶がないんですけれども、哲学者の西田幾多郎先生の歌の中に、「若者とまたマルクスを論じたり　マルクスゆえに寝ねがたきかな」「若人と……」でしたか、そんな歌がたしかありました。若い学生相手にマルクスを論じて、また寝そびれちゃったということですか……。

私の世代は、「革命運動がロマンになった世代ですね」と、いまひやかされてますけれども、学生時代にマルク

スにかかわり続けた世代であります。したがって、社会主義建設というものに非常に大きな夢を期待していたわけです。ところが、いまになってみますと、ソビエトにしろ、東欧にしろ、中国にしろ、社会主義建設の実験は、われわれにいま失望を与えているわけです。私たち20前後のときには、社会主義というものに命をかけて悔いがないという情熱を感じたんですが、いまの若者は全然そうじゃない。それは社会主義の実験が失敗した、あるいは十分な成果を上げなかったということです。そういう意味で、失望している世代なんです。しかし、失敗は成功のもとと考えれば、そうこだわることもない。

先ほどピアソンの評価の問題が、ちょっと話に出ましたけれども、内海さんなんかは、やっぱりピアソンをレーニンが罵倒しているものだから、ピアソンを少しも評価しないんです。あれはあんまり読んでいないと思うんです。(笑)

しかし、ぼくは、若いときには唯物論でなきゃいけない、観念論はダメだというふうに考えていましたけれども、いまはそうじゃないんです。いまは唯物論でも観念論でもどっちでもいいんだ。ただ、それがどういうものかということをおわきまえてさえいればどっちでもいいんだと考えている。だから、あまり科学、サイエンスということにこだわる必要はないと思うんです。問題は、むしろ人間のあり方なんだ。問題は、学識ではなくて人間の感性だということです。

それに関連することですけれども、そういう意味で、いままでの統計教育というものは間違っていたんじゃないか。その統計教育の間違いが、今日の統計環境の悪化

に1つの役割りを演じていると思うんですね。ですから、統計環境をよくするためには、統計教育を改めなくては行けない。つまり、統計をつくる立場の人のための講義じゃなくて、あたりまえの人のための講義が必要なので、統計学の話をする前に、統計に関心を持ち、興味を持たせるという努力が、まずなくちゃいけないと思います。関心のない者には幾ら話したってしょうがないんだもの。ですから、統計というのは役に立っているんだ、君たちの身の周りにあるんだ、それがなくなるとわれわれの生活はきわめて困ることになるんだ。そういう話をまずして、そんなに役に立つ、必要なものなのか、それならもう少し注意してみようという気持ちを、まず起こさせる。それが統計教育の第一歩だと思うんです。

そういう点で、統計環境の悪化を心配しておられる大屋先生に、今後ともよろしく願います。これが、今日の私の落語のオチであります。(笑)

大屋 改造社の『経済学全集』の中で、有沢先生が「統計学」の(上)をお書きになっていらっしゃいますね。たぶん「反デューリング論」からいろいろ引いて、大数法則を因果の説明として位置づけながら、統計学を構築しようとしていたように記憶していますが、ああいう話は、有沢先生のゼミでは出なかったですか。

安藤 ゼミでは、統計の話が出た記憶は私は全然ありません。有沢先生の講義は聞きましたけれども、私の記憶には、統計学らしい話は何にも残ってない。私と一緒に講義を聞いたクラスメートが金沢にいたんですが、その友人の話だと、有沢先生の講義の中で、白い玉を取り出

すとか、赤い玉を取り出すとかいう話を聞いたというんですが、私はそういう話を聞いた記憶は全然ないんです。

私が講義で聞いた記憶は、アッヘンバールとケトレーなんていう名前を聞いた記憶はあるんですけども、それは初めの方ですね。だから、統計らしい話は聞いていたはずなんでしようけれども、私の頭にはあんまり残っていないわけなんです。講義とははかないものですなあ。

私が金沢大学へ行くときに、たまたまそのころ出ていたランゲの『統計学入門』を、私の任官のお祝いとして有沢先生がプレゼントしてくださった。そのときに、このランゲの説は、ぼくの考えとほぼ似たようなものだということをいっていました。だから、有沢先生の考え方は、そういうあれと変わってないんじゃないですか。

大屋 先生は、自分で国勢調査の調査員になっていらっしゃいますが、あれはどういうお考えからだったんですか。何回もおやりになったんでしよう。

安藤 調査員になったのは、去年初めてです。国勢調査の調査員に対する説明会を傍聴してもらったことは、前にもありますけれども、金沢にありましたときには、私は労働講座をやっておりましたから、いわゆるお役所の方からは煙たがられていたわけです。ですから、県の職員、市の職員に対して統計の講義をしてくれということとは、頼まれたことは数回あります。県や市の職員研修のための講義はやりましたけれども、調査員にするのは警戒されたでしようね。私自身、頼んでもダメだと思っていましたから、頼んだことはありませんでした。

大屋 今度こちらにお見えになって、55年センサスの経験はどういうふうでしたでしょうか。

安藤 それは、私の今度の講義のプリントの中に、調査員をやった約2週間の日記みたいにならめて入れておきました。それをお読みいただければ……。経統研関東支部の月例会でやった話よりももう少し詳しく載せておきましたから。

大屋 一般の国勢調査員については、調査員の座談会を各地でやったテープがありますけれども、統計学者の方がみずから調査員をおやりになったのは、先生がおそらく初めてでしょうから、関心が非常に強いですね。

安藤 私は、もう少し何か事件が起こるといいと思って、なったんですけども、案外無風状態で済んじゃって、もう少しトラブルがあった方がおもしろくてよかったと思うんですけども。(笑)

森 城西地区でなくて、もう少し都心に近いところでやらなければ……。

大屋 先生がいらしたら、向こうの方が圧倒されて、これは無事に答えておいた方がいいということじゃないでしょうか。(笑)

安藤 この次は70歳超えていますから、老人として敬遠されるでしょうから、最後のチャンスだったわけです。

大屋 GHQにお入りになったいきさつとか、その中での高橋正雄先生とのご関係など、そこらあたりをちょっと……。

安藤 私が高橋正雄さんに初めて会ったのは、戦争中、上海です。高橋さんが大陸新聞社に迎えられて、上海で何かの会合のときに初めて会ったわけです。記憶があまりはっきりしてませんが、高橋先生はそのころは戦争で亡くなった奥さんと一緒に上海で生活しておられ

た。非常に仲のいいご夫婦だったですね。別に仕事の上では何にも接触はなかったんです。

そうして、戦争が終わる1年前に、私は逮捕されて日本に連れて帰られて、横浜のフタ箱に1年、それから刑務所の未決監に半年すわって、終戦になったわけです。7月の1日に形ばかりの裁判で、弁護士があらかじめ先にやってきまして、形だけ裁判するからしんぼうしてくれと了解を求めました。その弁護士が、飛鳥田社会党委員長のお父さん。この世の中の人間模様というのは実におもしろいものですね。

それで出てきたんですが、とにかく数年間上海にいたものですから、日本には何にも足場がないわけでしょう。ですから、職場を求めるといったって、非常におめにくいわけです。終戦後間もなく、何月ごろでしたかはっきりしませんけれども、出てきて真っ先にやったことは、中国研究所をつくる努力をしまして、中国研究所の創立大会の宣言を読んだりした記憶があります。ところが、中国研究所では食っていけないわけです。経済的な基盤も何もないんですから。

大屋 平野義太郎さんなんか、中国研究所に関係していらしたんですか。

安藤 平野義太郎さんも関係していました。

それからその前に、戦争が終わって東京の家へ戻ってきて、最初に私がやったことは結婚したことです。とにかく敗戦のどさくさで、物のないときでしょう。魚1匹、大根1本、何でもみんな配給で行列するわけです。私の母が、毎月そういう配給行列に立つわけです。戦争の一番つらいときに刑務所にすわって、親にさんざん心配さ

した。親に心配をかけるのは最大の不孝です。そういう最大の不孝をやって戻ってきた。こっちは兵隊にも行かないで生きて帰ってきたのは、最大の孝行だと思っています。わけなんだけれども、ずいぶん親は心配したと思うんです。私、いまこの年齢になって、しみじみそう思うんです、「オレは本当に親不孝をした」と。

私の母がいました。「おまえはめったに心配かけなかった」。つまり、入学試験なんかの心配は一切かけてないわけですよ。そういう意味では全然親に心配をかけていない。「そのかわりおまえは心配をかけると、本当にはらわたがよじれるような思いをさせた」というんです。断腸の思いというわけで。そうだと思うんです。戦争の最後の土壇場に、「おまえの息子は非国民だ、売国奴だ」といって、警察官にののしられたわけですから、ずいぶんそれは親に心配をかけた。

ですから、家に帰ってきて、まず親孝行をしなくちゃいかぬと私は思ったんです。親孝行をするためにはまず女房をもらって、配給行列は女房に立たせて、母親を立たせない。(笑) そのために非常に安易な結婚をしたわけです。それまでは、結婚についていろいろと夢を持っていたんです。私は、フランス語はできないから、フランス語のできる女房を持ちたいなんてことを考えていたんです。ところが、敗戦は、そういう夢を一切打ち砕いてしまった。

それでたまたま小浜に私の母の姉がおりまして、それから結婚しないかという話があったものですから、渡りに船とばかり福井県小浜まで行って、見合いして、すぐ決めちゃったわけです。つまり、女房をもらったのか、

配給行列のためにもらったのか、そういう非常に安易な——酒屋の娘で、酒屋の娘をもらっておけば、米と酒には不自由しない。(笑)全く戦争というのはいしようなないね。

それで女房をもらったでしょう。そうすると、どこか生活するために就職しなくちゃならないわけです。ところが、まともな会社、銀行、いわゆる企業は、敗戦のショックでみんな茫然としている時期ですから、まともな就職はできやせん。そこで、京都大学助手から東亜研究所に入った飯田藤次君、戦後、外務省の役人をしましたけれども、東亜研究所時代に彼を知っていたものですから、敗戦後、飯田藤次君を訪ねたら、飯田藤次君が都留重人と友人なので、都留重人がGHQに来てくれる人を探しているという話が出たわけです。それじゃGHQに行って都留君に会ってみよう。それで都留君に会ってGHQの経済科学局へ入ったわけです。

都留君の方では、私は上海の共同租界工部局、上海市役所で英語で仕事をしていましたから、英語をしゃべることはできたので、いい人が来てくれたというわけで、非常に喜んでいた。そして経済科学局へ行ってみたら、高橋正雄さんがそこにいたわけです。

高橋正雄さんにこの間会ったときの話で知ったわけですが、高橋正雄さんがなぜ経済科学局にいたかというところ、これは都留君に頼まれた。都留君は外務省の役人だったわけだけれども、アメリカに留学していた経験があるし、アメリカ人の友人がいるというわけで、経済科学局に顧問として呼ばれたわけです。ところが、都留君は、自分一人戦勝国のサービスをするのは何となく後ろめたい。

そこで、日本の左翼の高橋さんを一緒に連れていけば、自分の後ろめたい感じが消える。そういうことで高橋正雄さんと呼んだらしいですね。私は戦争末期に弾圧されて、日本の国家権力と闘っていたわけで、アメリカを敵にしておいたという気はないのだから、そんな後ろめたい気持ちは全然なかったんですよ。

そこで、経済科学局に行ったわけですが、いわゆる1600円ベースで賃金制限されていたころです。生活にみんな困っていたわけですから、GHQの中で労働組合をつくることになったわけですね。そして、労働組合をつくって、その委員長に私を担ぎ出したわけですよ。都留重人君が副委員長だった。そこで、GHQのビルの屋上で組合結成大会を開きまして、私はその委員長として、「何者も相手にしようとも、断固として闘う」といって演説をやったわけですね。それをみんな録音されていたわけだな。(笑)

そこで、GHQの方で調べたんでしょうね。こっちは別に隠すつもりはなかったが、結局、戦争末期に横決に入っていたこともわかるし、そういうわけで、やがてパージになって首を切られちゃった。だから、労働運動史には載っていないけれども、実質的に、私は日本におけるレッド・ハージ第1号ですよ。ずっと後日のことですが、都留君がアメリカの国会に喚問されたときに、アメリカ議員の口から、「ミスター・アンドーはラジカルか」という質問が出たのは、こういう背景があったからなんです。

GHQで私がやった仕事は、たった1つしかない。それは何かというと、石橋湛山を首切らせるのに役立ったということです。つまり、石橋湛山が大蔵大臣になって、ある程度インフレ政策をやることが必要だという考えを、

彼は持っていたわけですね。それがGHQの方針と対立して、石橋湛山を何とか首にしなくちゃいけない。それで、GHQは調べ出したわけですね。戦時中の石橋湛山のいろいろな言動を調べたわけですね。その資料を持ってきて、英語に翻訳してくれというわけですね。私は、2つ3つ、石橋湛山の文章を英語に直した記憶があります。そういう仕事をやって間もないころ、石橋湛山がパージになったわけですね。だから、何となく後味が悪いわけだ。それ以外は、大した仕事をしておりません。(笑)

ただ、それは、1つは私が結婚して、新婚ほやほやだったせいもあるでしょうね。頭がボヤッとしておったわけですね。(笑) 間もなく首になった。だから、GHQの仕事をやっていたのは、1年たたないと思います。

そして、GHQを首になって、ミスター・ターネージという男が上にいたのですが、そのときに私は、ターネージにたんかを切りましたよ。「オレは日本に民主主義を打ち立てるために役立とうと思って、GHQへ来たんだ。それがオレを首にするというならば、オレはこれから別の道で、日本の民主主義をつくる努力をする。さようなら」といった。ターネージは「グッド・ラック」といいましたっけ。それから労働運動をやったんです。印刷出版労働組合の書記になったわけですね。

それは、私が入ったのは2・1ストの後で、労働運動が完全に沈滞していた時期です。私が入って1月ぐらいたったころでしたか、5大印刷労組がストライキをやった。これが、2・1スト後最初の大きなストライキなんです。それで、やっぱりストライキをやればできるんだということ、またスト攻勢が全国的に広がっていったんです。

ね。それはおもしろかったです。印刷出版の書記から書記長になり、最後は副委員長になったんですが、書記長時代、実におもしろかった。とにかく組合がどんどんでき、そして共産党の指導の影響が非常に強い時期でしたから、組合の選挙をやっても、私がほとんどすべての票を握って、書記長に当選するわけなんです。米軍のCIが調べに来まして、どうして「安藤」という票ばかり出るのか、非常に不思議に思って、投票箱まで調べました。何かインチキしているんじゃないかって。あの組合運動は、実におもしろかった。それこそテーブル一つたたけば、賃金がピンと上がるというその時期でしたから。(笑)

しかし、やがて朝鮮戦争が起こり、産別会議が分裂して、日共の指導が間違っていたわけですね。そういう組合運動の反省は、別のところで書いております。10年ぐらい前だったか、私がやった労働講座のプリントがありまして、そのプリントから抜粋して、いま『ぐんぐん』という雑誌(東陽書房刊)に載っています。だから、いまでも少しは役に立つことが書いてあったわけでしょう。

ですから、GHQ時代は、仕事の上では統計とのつながりは大してないですね。ただ、あのころに、IBMの機械を最初に日本で使っていたわけですね。ですから、私は、IBMの機械を操作しているところを初めて見まして、非常に驚きました。それからランダムサンプリングの方式で統計をつくることも、あそこで始まったわけですね。CPIの最初の作成には、GHQにいた日本人が調査対象になって、サンプルとして協力したんです。音楽家の安藤幸子さんの息子さんが、IBMのスタッフと

してG H Qの中で働いていました。いま、日本IBMの副社長か何かやっているんじゃないですか。

そのころG H Qに、一緒に木原君もいたんです。後で吉植悟君が入ってきて、G H Qから彼は経済安定本部へ移ったわけです。だから、私もG H Qを首にならないでいたら、経済安定本部の中へ入って仕事をする事になったかと思うんですが、そういうわけで、道はまたそれ違ったわけなんです。

大屋 向坂正男さんの方は、先生ご存じなかったんですか。

安藤 向坂正男さんは、私が向坂さんの家に訪ねていったころ、まだ少年だったわけだ。

大屋 そんなに違うんですか。やっぱり有沢ゼミですね。

安藤 有沢ゼミで、私より3年ぐらい後じゃないですか。私が向坂先生の家に訪ねたころ、彼はまだ高等学校の生徒でした。

大屋 お話をお伺いしていると、「本当にいろいろなことがありました」という人生みたいですね。(笑)

安藤 上海共同租界工部局というのは、いわゆる外国租界の市役所だったわけですが、そこへ満鉄調査部から移ったわけですね。というのは、昭和16年12月にいわゆる太平洋戦争が始まって、共同租界を日本側が接收したわけですね。ところが、100年にわたって英米人が握っていた行政当局ですから、すべて英語で仕事をしていたわけですね。それで英語のわかる人間が欲しいということで、そのころ私は満鉄調査部から、新敵産管理委員会というところに出向していたんです。これは英米人の財産を管理する。ところが、一方、満鉄調査部が当局からだんだん

と監視がきつくなって、満鉄調査部の方でも左翼分子を集め過ぎたということで、疎散させようとしていたんです。ちょうど工部局の方から人を欲しいとやってきたんで、渡りに船と私を引き渡すことに決めた。私も、いつまでも調査部にいたんじゃ危ないと思っていましたから、共同租界の方へ移った。

この共同租界工部局で、私の移ったところがインダストリアル・セクションという。仕事は、工場監督、職業紹介、労働争議の調停、こじきの世話、そういう社会福祉行政をやるところだった。そこで一番大切な仕事は工場監督。それまでそこでやっていた仕事のキャップが、レヴィ・アレイ (Rewi Alley) なんです。オーストラリア人で、上海工部局で工場監督行政なんかをやって、その間に日中戦争が始まるわけです。それで上海にいらなくなっていて、上海から奥地の方へ入って、奥地で零細工場を組織して工業合作社をつくった。それで日本に抵抗する工業建設活動をやった。レヴィ・アレイはいまも北京で健在です。もう80歳をかなり過ぎているでしようが、そういうレヴィ・アレイがやっていた仕事の後を、引き継いだ。

だから、これはおもしろかったです。工場監督ですから、工場で機械で負傷したとか、ボイラーが爆発したとか、そういう工場災害がありますと、連絡してくる。すぐ自転車に乗って、現場へ行くわけです。私は『資本論』の中の工場監督官の話を思い浮かべながら行くわけだ。実に楽しかった。(笑) 事実、あのと通りの姿でした。5つ、6つの小さい子供が、電球なんかの仕事をやっているんです。それからお茶の葉っぱ、出がらしからカフェ

インを抽出する仕事をやっていた。とにかく中国的な町工場の、一番みじめな現場を見ることができました。印刷工場の機械なんか裸で運転しているから、すぐ負傷するんです。そういう事故が起ると、そこへ行っ、これはカバーをしなくちゃいけないとか、職業病は気をつけなくちゃいけないとか、そういうことをやった。戦争中だったけれども、そういう社会福利行政をやっていたから、非常に楽しかったです。

その中に、統計をつくるセクションがありまして、毎月、生活費指数をつくらせて発表していました。そこに蔡正雅という中国の人がいて、これは学者的なタイプの人で、統計の主任をやっていました。

そのうちに、日本の軍が、上海の郊外に墓場をつぶして飛行場をつくることになりまして、その墓場に棺を埋めているやつは、みんな棺を掘り出して持ち去れということになった。ところが、そういうことに絡んで、中国側の悪いやつがカネをむさぼるわけです。日本の軍の委託を受けた形になって、棺を掘り出すには手数料を取るわけです。たまたま蔡正雅君の家族の墓に棺が埋まっていた。両親と子供の、たしか棺が3つだったと思います。3つの棺を掘り出さなくちゃいけないんだけど、カネがなく、とても要求されるようなものを払うことができないんだ。だから、飛行場になってもしょうがないから、いつそのことそのままにしておこうかと思っているんだということを、私に打ち明けるわけです。

それはいかぬ、いったん飛行場になると掘り出すことはできないから、何とかしてやろうとって、そこで、そのころ新敵産管理委員会で知り合いになっていた海軍

の若い将校がいたんです、大口中尉という。(昔、大蔵大臣か次官だった大口喜六さんの息子)戦後、この大口中尉も農林事務次官かになってましたよ。そこへ行きまして、何とかただで掘り出すことができるようにしてくれと頼んで、軍の方から、この3つの棺はただで掘り出すことを認めなくちゃいけないという命令を出さして、私がトラックを雇ってそこへ行って、掘り出して、また上海の租界の中の棺ばかり集めておくところへ収容しました。蔡正雅君は、涙を流さんばかりに喜びました。「すっかりあきらめていた。ミスター安藤のおかげで助かった」。それも、またやっぱり楽しかったですね。「It's my duty to offer social service.」といって。(笑)

森 満鉄にはどれくらいいいらっしゃいましたか。

安藤 私は、大学を出てすぐ東亜経済調査局というところへ入ったんです。そのときにいたのが、岡崎次郎さんです。岡崎次郎さんへの紹介をしてくださったのが、有沢先生でした。それが昭和11年の4月ですね。

その前に、私は朝日新聞社を受けたんだけど、採用してもらえなくて、普通の会社に入る気は全然なかったわけです。東京電気をたしか受けて、「ご縁がございませんでした」という返事をもらった。就職試験を受けたのはその2つぐらいです。結局、満州日日新聞というのが当時大連にありまして、そこへ行こうということに話がまとまりかけていた。有沢先生が、「安藤君、どこへ行くんだ」というので、「ぼくはどこへも行くところがないから、満州日日新聞へでも行こうかと思っています」といったんです。そうしたら、有沢先生が、「わざわざ満州くんたりまで行って、軍部のお先棒を担がぬでもよかりそ

うなものじゃないか」というわけですね。こっちはしめた
とはかりに、「それじゃ先生、どこかへ入れてください」。
(笑) そこで有沢先生は責任を感じちゃって、岡崎次郎さ
んに紹介してくれた。それで東亜経済調査局に会いに行
った。

そうしたら、いまちょうどオランダ語のできる人を探
しているところなんだという。それじゃ、ぼく、これか
らオランダ語を勉強しますから採ってください。(笑) そ
れから丸善へ行って、オランダ語の本を探したんです。
ところが、オランダ語の本がないんですね。日本語で書
いたオランダ語の入門書がないかと探したが、あれほど
蘭学が盛んだった日本において、全然ないんです。やっ
と丸善の中に、「ダッチ・シンアプリアイド」という薄っ
ぺらい本が1冊見かった。それを買ってきまして、オ
ランダ語の勉強をやったんです。オランダ語というのは、
ドイツ語の薩摩弁みたいなもので、それをどうやら読み
上げて、また東亜経済調査局に行った。「どうです、オラ
ンダ語できるようになりましたか」「まあ、何とか新聞ぐ
らいは読めそうです」と、よくいえば敢闘精神が旺盛と
いうわけだけれども、実のところは、はったりばかりき
かしているんだな。(笑) それで、結局、就職したわけ
です。

そうしたら、ジャワから毎週オランダ語の新聞が来る
んです。それを見て、切り抜くべきところに印をつける。
新聞の見出しぐらいは読めるようになっていましたから、
そういうことをやっていたんです。そうしましたら、そ
こへオランダ人がやってきた。(笑) そのオランダ人は、
ジャワにいて、日本海軍に情報を提供するスパイだった。

ところが、身辺が危なくなつて、日本へ逃げてきた。スパイとしてつかまりそうになつて、日本へ逃げてきて、海軍に何とか食わしてくれと泣きついた。海軍も責任があるものだから、それじゃ東亜経済調査局で何とか囑託にして食わしてやってくれ。それで東亜経済調査局が、囑託に呼んだ。それが、私のお隣に来まして、ファン・ディーンストという男で、そいつにオランダ語の新聞の重要なやつをチェックして、簡単に英訳しろと押しつけた。だから、私はオランダ語を読む必要がなくなった。

ところが、それから数年後、敗戦になりまして、あるとき新聞を読んでいたら、そのファン・ディーンストがつかまって、オランダに送り返されたという小さな記事が出ていました。やっぱり「天網恢恢疎にして漏らさず」で、おそらく20年か30年くらいぶち込まれているんじゃないかと思います。ユダヤ系の男だったと思います。娘ができたんだといって喜んでいたりして、人間的には憎めないやつでした。ケチでしたけれども……。

その東亜経済調査局から、昭和13年の正月到北京へ出張を命ぜられた。というのは、東亜経済調査局というのは、もともとは大川周明がつくった調査機関なんです。大川周明が満鉄の調査局長だったときにつくったんです。そして、満鉄から独立して、財団法人の研究所にして、財界や軍からカネを集めてやっていたわけです。そこで日中戦争が始まって、軍でも人が要るだろう、こっちも軍とますます密接に、資金確保をしなくちゃいかめということだったんでしょう。数人の人間を北京に派遣して、それに加わって私は北京に行つたんです。北京に、13年の正月から5月ごろまでいました。

行ったんだけれども、別に仕事をさせてもらえるわけでもないんで、陸軍特務部調査局という看板だけかけて、ただごろごろしていたわけですが、私自身は別に戦争に協力する気持ちはないわけですから、何とか兵隊にならずに、戦争が終わるまで生き続けていればいいんだ。その間に、自分のやりたいことをやればいいんだというわけで、その最初の5カ月の北京生活のときに、私は中国語の勉強を始めたわけですよ。中国人の家庭教師を頼んで、北京語の勉強が始まったわけですよ。

ところが、5月ごろに今度は戻ってこいという連絡があって、東京へ戻ってきた。そうしましたら、今度はインドネシアに行って調査をやってくれという、こっちは、もともとオランダ語をやりますということが入ったんだから、断ることはできないんですけども、5カ月の北京生活は、私を非常に中国に結びつけてしまったわけですよ。そこで、「ぼくはインドネシアに行きたくない、ぜひ中国に続いていたい、何とかいられるようにしてくれ」。そうしたら、幹部の連中は困っちゃって、「君がそういうんなら、それを直接大川先生にいつてみる」。それから、大川周明に会いまして、「私は、いまの日本で最も大切なのは中国問題の解決だと確信するようになりましたから、インドネシア行きは何とか勘弁してください」といった。そうしたら、大川周明もそれには反駁できないわけですよ。じゃ、しょうがないということになっちゃって、また上海へ行くことになった。そのとき、初めて大川周明と口をきいた。大川周明というのは、大変なやぶにらみ（斜視）なんです。行って、あいさつしましたら、あらぬ方向に視線を向けているんですよ。

大屋 ぼくは、たしか「日本資本主義社会の機構」か「日本資本主義分析」かどっちかだと思うんですが、「大川周明」と署名のある古本をどこかで買ってきて、これはおもしろい、とっておこうと思って、置いているはずだけれども、それがどこへ行ったのかわからないです。ああいうものを彼は読んでいたんですね。

安藤 彼は大変な読書家ですよ。非常に偉かったと思います。というのは、研究所の主宰者としては偉かったと思う。とにかく、研究所の所員が何時に出てくるかとか、そんなこと一切干渉しない。全部任せきりで、論文を書いても書かなくても、一切干渉しない。研究者というものは、自由にさせなくちゃいけない。出勤も何も自由だ。私は、最初にそういうところに入ったものですから、戸惑いました。朝、出勤は9時ですと一応決まっているわけです。ところが、9時に行ってみますとだれもいないんですよ。一番早く出てくるのが、岡崎三郎君なんです。私が行ってしばらくすると、岡崎三郎君が来る。あるいは、ぼくが行ってみると、岡崎三郎君が先にいるわけです。すると、「おはよう、コーヒー飲みに行きませんか」。すると、東拓ビルにあった調査局の前が大阪ビルでレインボーグリルがあるんです。そこへ行ってコーヒーを飲む。戻ってくると、もう10時ぐらいいになっているわけです。(笑)

大屋 三郎さんもご一緒だったんですか。

安藤 調査局で三郎君と一緒にだった。岡崎兄弟は、おふくろが違うんですか、全然顔が似ていない。あのころは、岡崎次郎さんと三郎さんと、向坂さんの弟さんの山崎八郎君がいたんです。

そんな調子で、だから就職したけれども、いわゆるサラリーマン意識はこっちには全然ないわけです。コーヒー飲んで帰ってきて、1時間ぐらゐると昼飯でしょう。また外へ行って昼飯食って、(笑) 戦争が始まるまでの間は実に自由だった。そのころ「プラウダ」も「イズベスチア」も取ることができましたから、ちょうどソビエトの裁判事件のあるときで、ああいうニュースが盛んに載っていました。

大屋 どうもいやな感じがしますのは、昭和19年、20年は、学生時代で敗戦と混乱、そして約20年後にはベトナム戦争と大学紛争でしょう。だから、この周期でいくと昭和60年ぐらゐに、また転機みたいのが来るんじゃないかなという感じがして、何となしにいやな感じがすけれども、先生ごらんになっていて、また変なことになるんじゃないかという……。

安藤 なると思います。日本人の根性は少しも変わっていないもの。民主主義の根は少しも根づいてないですから。

坂元 ちょっと雑談になるかもしれませんが、同じようなことですが、絵の好きな人が、江戸の幕藩体制が出てから、時間を追って画風を見てみると、やっぱり昭和の戦争が終わってからのこれまでの軌跡を見ると、非常に似通ったあれがあるというんです。それは絵に限らず、何でもきっとそうだと思うんですね。ちょっと社会が腐りかけている感じが、道徳的な面、倫理的な面で見えますね。だから、きっと何年かの周期があるんですよ。

大屋 ありそうな気がするね。

安藤 ただ、日本はそうでも、日本の周りは変わってい

ますから、そういう意味では、まだ希望はあると思うんですがね。

共同租界工部局で生計費指数をつくっている話をしました。そのころ、日本の紡績工場の係の人が、毎月生計費指数を私のところへ聞きに来るんです。今月はどういう数字が出ましたかと、えらく熱心に生計費指数を聞きに来るなと思っていたんですが、その目的が後でわかりました。

一つは、私にお嫁さんを世話しようと思って来るわけなんです。当時、日本では35対1とかいうことで、婿探しが大変な問題だった。それで親戚の娘が日本にいて、どこか上海に独身の男で目ぼしいのはいないかと頼まれていたらしいんだ。そこで、毎月生計費指数を伺いますという口実で、私に会いに来て、観察していたわけです。とうとうあるとき写真を持ってきて、「どうですか」というわけだ。見たら、とても見られたものじゃない。(笑)それで断っちゃって、それはそれで片づいたんです。

もう一つは、「あなた、毎月熱心に生計費指数を聞きにおいでになるけれども、これをどういうふうに利用するんですか。私は中国の賃金を見て、とてもこれじゃ生活できる賃金じゃない。あなたは毎月、生計費指数を聞きに来ながら、それを基礎にして賃金を考えることを本当にやっているのかどうか」と質問したんです。そうしたら、「私も、実はびっくりしているんです。うちで払っている賃金は、とても食える賃金じゃない。どうしてこれで食っているのか、私も不思議でしようがない。ところが、それで募集すると幾らでも求職者があらわれる。そこで、それでいいんだなと思ってやっている」という話

だった。だから、生計費指数は賃金のための資料にならないんだ。(笑) 統計というのは、そういうものですね。

そのうちに、私が逮捕されたわけです。私が逮捕されたのが、昭和19年の3月末。そのころ、私は上海のフランス租界に住んでいたんです。イギリス人が住んでいた家の後に入っていた。地下室があつて2階ですから、全部で3層楼です。テニスコートよりちょっと狭いぐらいの庭がありまして、フランス租界でも法国公園に近いところだったです。梅蘭芳の屋敷がそばにあつて、独身だったけれども、いいところに住んでいたんです。

ところが、ある朝早く領事館警察の刑事が3人かなにかで、逮捕状を持って来ました。それから連絡船が来るのを待って、領事館警察の留置場に1週間ばかり入っていた。そこに、朝鮮人革命家が1人入っていました。これは重慶政府の方について、戻ってくるところをつかまされたという男でした。あれはどうしたかな。毎日生懸命体操していましたよ。

大屋 上海で逮捕されたときは、何の容疑ですか。

安藤 そのときは、日本の特高がかつて検挙した、前歴のある者は根こそぎ逮捕するという方針だったんでしょ。私は、その前に2回逮捕されていますから。

大屋 理由も何にもないわけですね。昔の古傷で。

安藤 ですから、逮捕されて横浜へ来て、特高の刑事が最初に尋問したことは、「おい、安藤、おまえ、畳の上で死にてエか」、それが尋問なんです。それから、「おまえ、国防保安法を知っているか」。

おかしなもので、ブタ箱に入ってみましたら、ブタ箱の便所の落し紙に六法全書のちぎったやつが置いてあ

ったんです。私が見たら、たまたまそこに国防保安法が印刷されていた。(笑) 私は上海にいたから、治安維持法が改悪され、国防保安法ができていることを知らなかったんです。それで、それを読んで覚えたんです。そうしたら、その直後に「おまえ、国防保安法を知っているか」と来た。そこで、覚えたばかりの条文をいいかけた。「よし、わかった。それだけ知っていりゃ十分だ。てめえ、命、要らねえっていうんだな」、これが取り調べ。そんなことで、それから1年ブタ箱にいたわけです。

ところが、半年目に疥癬にかかって、全身疥癬が広がって、急性腎臓炎になる。私は顔がすっかりはれ上がっちゃって、尿毒症1歩手前まで行ったんです。そこで、入院させなくちゃいかぬということになって、入院した。私が入院する病院へ行く途中、サイパン島から飛び立った最初の爆撃機が来ていまして、空襲警報の中を病院へ運ばれた。そして1月いました。毎日スカボールという油薬を全身に塗って、疥癬の治療をして、治って、またブタ箱へ入った。

そして半年したら、あの当時の法律で、満1年以上警察に留置できない。1年の間に、起訴するかどうかを決めなくちゃならない。結局、私は途中で入院したから、それから後は拷問を受ける心配がなくなりましたので、とうとう最後まで否認しちゃって、否認調書を書かせた。おもしろかった。「おまえがそこまでがんばるんなら、否認調書を書かしてやる。だけど、安藤、いいか。特高警察に否認調書を書かせることはどういうことか、意味わかってるのか。日本の警察は一生きさまをつけねらうぞ」といいました。これは大変なおどかしですよ。しか

し、こっちは、戦争は間もなく終わると知っていましたから、つけねらうならつけねらえというわけで、とうとう否認調書で押し通した。

そのとき、手島正毅と一緒に逮捕されたんです。手島君が大連から来て、横浜の水上署のフタ箱で一緒になった。

坂元 統計に戻りますけれども、ピアソンの翻訳をなさって、どういう感想というか、どういうお考えを——もともとの動機はどういうことなんですか。金沢で、古本屋でたまたま手にされたわけですね。そして、翻訳されたとおっしゃったけれども。

安藤 ピアソンの『グラマー・オブ・サイエンス』が、春秋社が出した『世界大思想全集』の中で、平林初之輔訳で『科学概論』として訳があることは、私、知っていました。そこで、第3巻と平林訳とを突き合わせながら読んでいったんです。ところが、平林訳が非常に誤訳が多いわけです。せっかく名著とされていたピアソンの本が、こんなに誤訳の多い訳本でしかないというのは、非常に惜しいことだと思って、自分の勉強のつもりで訳し直したんです。

1つは、レーニンの『唯物論と経験批判論』の中で、レーニンがピアソンをマッハ主義者としてくそみそに罵倒していますね。ところが、『グラマー・オブ・サイエンス』を読んでみると、ピアソンは別に唯物論者と論争なんか全然していないわけです。科学の発展のためには、健全な観念論の方が唯物論よりも役に立つんだ、そういう立場でいっているんで、別に唯物論と観念論とのけん

かをしているわけじゃないんです。科学の発展のためには、絶えず批判と自己批判を忘れちゃいけない。「批判が科学の生命である」というフランスのクーザンという人の言葉を、タイトルページに印刷してあるわけです。批判と自己批判を忘れれば、正しい理論もやがて教条になってしまう。そういうことをいっているわけです。つまり、科学の進歩のためには、批判が大切なんだというのが、あの本の最大の眼目なんです。

それに対して、レーニンの方は、唯物論と観念論の論争の問題として引用しているわけで、ピアソンはマッハ主義者であり、観念論者であるといっって、罵倒しているわけです。だから、レーニンの一人相撲みたいなもので、それを発見して、私は非常にうれしかった。というのは、マルクスとレーニンにすっかりいかれておったわけでしょう。レーニンも案外インチキなことをいっていることを発見したんで、そういう意味で非常にうれしかったんだ。マルクスが、女房以外に、ついてきた女中さん、ヘレーネ・テムートに子供を産ませたという話がありますね。あれを知って、私は非常にうれしかった。マルクスにも、やっぱりああいうマイナスがあったんだ。(笑) つまり、私たちの世代は、マルクス、レーニンというのは、神に近いように偉い人だと思いついていたわけでしょう。だから、その欠点を発見することは、非常に心のくつろぎを得ることができるわけだ。そういう意味で、非常にうれしかった。それもあって、『グラマー・オブ・サイエンス』を翻訳したわけです。

森 『経験批判論』の本が書かれたいきさつも、やっぱりあるわけですね。ロシアの……。

安藤 あれも、国内の運動の中の対立ですね。

森 そういう意味で、少し引きつけ過ぎという傾きもあるかもしれません。

坂元 強引に引きずり込んでやっているという……。

安藤 あれも、レーニンがボグダーノフを革命運動でのライバル——論敵にしていた関係でしょう。

坂元 きっと問題にしている側面が違ふんじゃないですか。つまり、何か客観的なものから法則みたいなものを発見するときの感覚とか、思いつき、アイデアの、人間の観念の果たす役割りを、一方は問題にしているという気がするんですね。

それに対して一方は、そうじゃないという気がするんですね。ちょっと不正確だけれども、やっぱり弁証法とそういう観念論とは、問題にしている次元がちょっと違ふんじゃないかという気がするんです。でも、ぼくはその観念論の方は、全くそのとおりじゃないかなという気がしてしょうがないんです。別に何にも哲学なんて知らなくたって、虚心坦懐に事実を見れば、そして事実の中を矛盾なく説明していこうと努力しさえすれば、とらわれていない方がいいことをいったりしたことが、非常に多いと思うんです。

安藤 いま、物質観——既存の物質像——が、また揺らいできているでしょう。ですから、またそういう問題に関心を持つ人が、出てくる時期になるんじゃないかと思うんです。物質不滅というふうに私たちは教えられたけれども、いまや物質不滅が怪しくなってきたわけですね。それでも宇宙に始まりがあったという説を、いまだにいつているから、ぼくは始まりというのはないんじゃないか

と思うんです。無から有は生まれないはずですよ。逆に有から無の概念が生まれるんであって。ところが、天文学者なんか、いまだにビッグ・バーン、最初の大爆発があって、それから宇宙ができたということをいうんでしよう。爆発は何の爆発だったのかということになる。(笑)

坂元 神様を置きかえただけです。神様がおつくりになったというのと、あまり変わらない。

安藤 変わらないですよ。だから、そういう意味で、唯物論だ、観念論だといってけんかしていたのは、大したことじゃないと、私はいま思うようになったです。

そういう意味じゃ、仏教の思想が、非常におもしろいですね。

大屋 全く話が違いますが、この間、梅原猛の「神々の流竄」という本を読みましたら、「古事記」の新しい解釈でおもしろかったですね。本居宣長にとらわれちゃいかぬ、津田左右吉にとらわれちゃいかぬという考えですね。独創というのか何というのか、あれは独創といわないのかもしれないし、当てずっぽうで書いているのかもしれませんが、おもしろいですね。

安藤 いま私は、宗教というのは一種の文学だと思っています。文字で書くのが文学、思想で書くのが宗教で、どちらも芸術だ。科学と対立、闘争しなくてよい。

坂元 この間の経統研の総会の際に、先生が、自分は労働組合のあればかりやっていたから、とうとう統計学の体系はつかめなかったとおっしゃったけれども、私はひそかに、先生は統計に対して健全な感覚を持ち過ぎていらしたから、できなかったんじゃないかなという気がするんですけども、(笑) いかがですか。

森 体系をつくった人は、健全でないわけですか。(笑)

坂元 やっぱり誤解とかそういうのがなければ、できにくいという面がありますでしょう。強引に、相手がいやといているのに引きずり込んで、誤解の上に誤解を重ねて、言葉は悪いですが、ときにはそういう面がないとも限らないわけですね。

安藤 体系をつくる人はね。

坂元 むちゃくちゃ強引に、継ぎ木に継ぎ木をしながら、話を続けていくわけでしょう。ところが、実に素朴に考えて、そんなにきれいに説明つくものかしら、現象というのは、そんなに1つの視点から割り切れるものかしらという気がするんです。非常にシンプルな、原始的な社会ならともかく、そうでないところを、そんなにカッチリ説明できるかしらと、非常に素朴な疑問としてそういうのがあるんです。だから、案外何でも相対主義というか、素朴な感覚を持っていると、どうも体系ができないんじゃないかという気がするんです。

だから、内海先生とか大屋先生みたいに、かなり個性の強い人でないと。(笑)

大屋 いや、ぼくよりも安藤先生の方が強い。いまごろから、そういう境地に達しちゃいかぬ。安藤先生ぐらいのお齡になって、その境地に達しないと。(笑) ぼくは、これからそういう境地に達していかなきゃならぬ。

強引に1回見てみないと、やっぱり突っ込みがきかないですから、また後で反省することにしまして。

森 もう何年か前になりますけれども、経統研の記念大会を京都でやりましたときに、大屋先生が様々な論者を、1つの図式の中に当てはめられた場合、安藤先生は、内

海先生とか蜷川門下の人たちと違うところに配置されていたように、ぼくは記憶しているんです。経統研の発足に際しても、関西の蜷川門下生の先生方と、関東の、官方統計にわりと関心の深い方々と、それが結合して経統研になった。安藤先生は地理的にも金沢で、それが客観の立場に立っているかどうかわかりませんが、そういう蜷川門下生と関東の流れと、相対的に自立できるような、あるいは自立されていたような気がします。そういう安藤先生の立場からごらんになって、経統研のその後の動きというか、あるいはどういう形で蜷川先生の理論的な後継者たちをおとらえになっていらっしゃるのですか。

安藤 それは、上杉君とのつながりなんです。上杉正一郎君は、最初、私と一緒に東大経済学部へ入った。そして滝川事件で、逮捕される前に彼は東大をやめて、京大へ行ったわけです。ですから、統計学にかかわる前から、私と上杉君とは友人だったわけです。彼が京都に行って、蜷川さんの弟子になって、そういう関係があったから、経統研ができたときに、私が講義をするようになったのとちょうど同じ時期だったわけですから、それで経統研と初めからつながりができたわけです。上杉君を通じて、大橋隆憲さんと知り合い、大橋隆憲さんを通じて、内海君とも知り合うようになる。有田君も、そういう関係ですね。だから、みんな統計学とかかわり合う前から、何となく一緒に集まるような運命にあったんだね。

大屋 そうですね。

安藤 松川さんでもそうでしょう。松川さんは惜しいことをしましたね。

大屋 松川先生は、急にひどくなられたんですか。

安藤 松川さんは息子さんに先立たれて、あれが非常にショックだったようですね。あれから、外へ出る意欲をすっかりなくしちゃったんじゃないかしら。

松川さんは、ペティーの研究にひたすら沈潜して、学士院賞をもらうまでの業績を残したけれども、私は、松川さんがああいうふうにはペティーに沈潜したのは、本人に聞いたことはないんですが、私の想像では、彼は左翼運動の記憶をみずから消したために、ペティーに没入したのではないかと想像しているんです。というのは、私が金沢で労働講座をやりながら講義をしているんだという話を彼が聞いて、私に対して非常にひけめみたいなものを感じたというふうには、私は感じました。彼は、ほかの人にはかなり厳しい態度をとっていたようだけれども、私には一目置くような、非常に遠慮した姿勢だったな。

坂元 さっき、前半の最後に、現在の先生の統計に対する心境みたいなこととお話しになりましたけれども、経済統計研究会みたいな研究会が統計の中で、これからこういうことをやるべきだとか、進んでいくべき方向、こういう問題を取り扱うべきだとお考えですか。

安藤 これから経統研がだんだんと若い会員がふえていきまして、つまり戦前派が消えていきますね。左翼運動をやったような世代が消えていってしまって、完全な戦後世代の研究会になると思います。それは歴史の流れで仕方のないことですけれども、私がいつ期待したいことは、やはり全国各地で統計の実務に携わる人に、何とか学者と接触を密に持たせるような場にしてほしいという

ことです。ですから、会員の中に統計実務家を、意識的に迎え入れる努力をしてほしいと思います。それによって、統計教育を変えていかなくちゃいけない。統計教育を変えなければ、統計環境はよくなると思います。

これから、ますます開かれた政府をという要求が、民衆の要求として強くなりますから、それを助けていくような仕事を、統計学者はやる必要があるんじゃないかと思うんです。これは統計学の問題には直接なりませんが、やはり統計が発達するためには、言論、出版、結社の自由、情報の自由というものを大切にしていかななくちゃいけないと思うんです。

森 安藤先生の金沢大学での最終講義に、第4の人世にやりたいことが3つ挙がっています。その中には、四角号碼学会をぜひつくりたい。それから統計に関する主な点としては、指標体系のことを考えてみたい。それはどういうことなのでしょう。

安藤 つまり経済統計だけでなく、あらゆる社会統計を取り入れた指標体系をつくらなくちゃいけないというのが、私の主張です。政治統計も、教育統計も、選挙統計も、文化統計も、あらゆる一切の社会統計を取り入れた指標体系をつくらなくちゃいけない。

坂元 それは、なぜそういうことをお考えになったんですか。

安藤 つまり、人間社会を全体的にとらえていくためには、そういう努力が必要だというふうに考えるわけです。

坂元 経済面だけでは、もう包み切れないうたということですか。

安藤 鯨岡環境庁長官の言葉を使えば、経済は手段でし

かない、目的じゃない。目的は人間の生活なんだ。経済は大切だ、しかし、それは手段である。

同じように、経済統計は社会統計の中で一番大切なものだ。しかし、統計そのものが人間社会をよくするための一つの道具である。経済指標体系は最も大切だと思ってくれるけれども、それだけで人間社会はつかみ切れるものじゃない。あらゆる社会統計の指標を立体的に構成した指標体系をつくらなくちゃいけない。これが私の持論です。しかし、それは、とても一人じゃできないから、大ぜいでやらなくちゃいけないという主張です。

その次は、国会議員の統計の使い方に対する批判です。小原正治君という私の友人が、国会図書館の資料課にずっといたんです。いまはもう定年でやめましたけれども、彼が私のところへ、国会の議事録、委員会の速記録をくれたんです。あれは膨大なものですから、私がもらったのは物価委員会と社会労働委員会の2つの速記録を、ずっと十数年にわたってもらいました。それを読んでいみると、国会の審議というのは実にお粗末なもので、官僚に振り回されているわけです。その中で、統計も非常におざなりな使い方をしているわけです。ですから、国会議員はもっと勉強しなくちゃ、本当の審議をすることにならぬということを、統計の側からひとつ暴露してやろうというねらいなんですか、これも資料があるだけで、なかなかやっているひまがなく、いまだに手をつけておりません。

しかし、民主主義を本当に理解するためには、国会というものは大したものじゃないんだということを、すべての国民が知らなくちゃいけないですね。国会が何か意

味のあることをやっているんだと考えるところに代議政治が生まれるのであって、本当の草の根民主主義が本格的になるためには、国会議員なんて全然役に立たぬものだ、まさにレーニンがいったように、あれは寄席にすぎないんだということを、すべての市民が知る必要があると思うのです。もっと早くそれに気がつけば、もっと早くからやれたんですけれども、とにかく労働講座ばかりやっていたものだから。(笑)

坂元 若い研究者に先生がこういうことをやれと指導される立場になられたら、どういうことを要求されますか。

安藤 だから、国会速記録なんかの検討をみんなそれぞれ分担して、1人が1つの委員会をやって、すべての速記録を集めてやると、いい研究ができると思うんです。

ところが、議会の速記録をちゃんと集めている図書館はないんですよ。日本の国会図書館とワシントンの国会図書館ぐらいじゃないですか。それは非常なスペースをとるものですから、各県の県立図書館なんかにもそろっていないですね。しかし、あれは意識的に集めれば、みんなただで集まるんです。委員会に参加している議員には、その委員会の速記録をみんな配っているんですから、それを集めればただで集まるはずなんです。

次に、四角号碼学会はもうできているんです。というのは、私1人でつくっている学会なんですから。(笑) 森繁劇団という劇団がありますけれども、あれはレギュラーメンバーは森繁久弥1人なので、1人で劇団をつくっているのです。それと同じように、私1人で学会をつくっている。私の作品がだんだん売れるようになってきた。神田の内山書店に置いてもらっているんです。



坂元 この間、埼玉大学で四角号碼法研究会というのがあるんですね。立て看が出ています。

森 安藤先生が書かれたんじゃない？（笑）

安藤 あそこには何学部があるんですか。

坂元 わかりませんけれども、やるとすれば教養学部が何かかなと思いますけれども、クラブかもしれません。

ただ、四角号碼法研究会と書いてあった。

安藤 それじゃ、そのうち連絡してくるでしょう。実績はこっちにあるんだから。

坂元 ちょっとまた統計の話に戻ると、さっき部門統計ということをおっしゃった。だから、講義も集団的な講義になる。非常におもしろいと思いますのは、私は数理統計学のところにいるわけですが、数理統計学の分野でも、結局若い人たちは、何か一つ具体的な対象を持つ。だから、いままでだと数理統計学の理論みたいなものが、研究対象としてあったんですが、それがだんだんなくなってきている。何でもいから、一つの分野を持つ。医学統計だとか、疫学だとか、あるいは私なんか世論調査ですが、そういう具体的な対象を持つことを、みんな非常にはだで感じているんです。結局、方向としては、似たような感じだと思うんですが。

それは、私なんか非常によくわかるんですね。教科書を読んでいる間はいいいんですが、少し何か突っ込んだことをやろうと思ったら、具体的な対象を持たないと、そもそも数理統計学だったら、現象を記述するための統計量をつくるということが最終目標ですね。そうすると、どういう統計量をつくらいいかという問題意

識さえわいてこないんですね。それは、やっぱり具体的な問題を分析しようとして、そのために必要な統計量は何か、そういう問題意識しか出てこないんですね。ですから、すべての科学がきっとそうだと思うんですけども、数理統計学も一時期の、創始者がつくるときは、非常にどろどろした現象と問題意識がモロに出てきているような考え方をして、だんだん形式化され、抽象化されて、理論的に整合すること、整合性ばかりを求めている。また揺り戻しがかかってくるというような感じが、数理統計学でも見られそうですね。だから、先ほどからおもしろいなと思って。(笑)

大屋 まだ、いろいろお伺いしたいこともございますが、きょうのところはこのくらいで……。

お忙しいところ、ありがとうございました。